

第5表 火力乾燥と吸水性(昭49)

項目 区名	供試重量	吸水後 重量	100g当り 吸水重	備考
自然乾燥	300 ^g	605 ^g	101.7 ^g	水温25℃ 浸水時間 5.0
火力乾燥	300	615	105.0	

すなわち、皮切粒、しわ粒と火力乾燥については、皮切粒の発生と関係なく品種間差異の方がはるかに大きい。一方、しわ粒の発生は、火力乾燥でやや多目となり、粒の光沢も若干劣るが、実用的形質としてはほとんど問題がないものとする。なお、火力乾燥の吸水性にはほとんど差が認められず、本試験の方法によるダイズ火力乾燥法は実用性があるものと判断された。

4 摘 要

ダイズ火力乾燥の実用化について要約すれば

- 1 莢付茎ごと乾燥は品質保持上有効な乾燥法と考える。
- 2 ほ場での立毛乾燥を計ることが望ましい。
- 3 乾燥むら防止のため、乾燥碎網上に積み上げる方法が望ましい。
- 4 子実含水率20%前後のものを約40℃で乾燥すれば8～9時間で15%となる。
- 5 ホップ乾燥機(3坪型)の場合、生体重1.1ton(乾燥子実重約380kg)は、充分乾燥可能であった。

ラッカセイのマルチ栽培に関する研究

第2報 作季と開花登熟の関係について

佐藤 忠士・佐々木邦年・神山 芳典
(岩手県農業試験場)

1 ま え が き

前報ではラッカセイのマルチ栽培における極早生系の大粒種導入による安定増収について報告した。

ラッカセイは本来、開花登熟期間が長く、無霜期間の短い北東北では積算温度に乏しく、極早生のタチマサリを用いても、作季の可動範囲は狭く、早期播種は収量上重要な課題である。

普及当初(1969年)の播種期はラッカセイの生育下限温度を15℃におき、岩手県中北部では5月20日を播種の安全限界とした。

その後、生育相解析による調査結果から安全作季について若干の知見を得たので報告する。

2 試 験 方 法

1 試験年次 1970～1975年

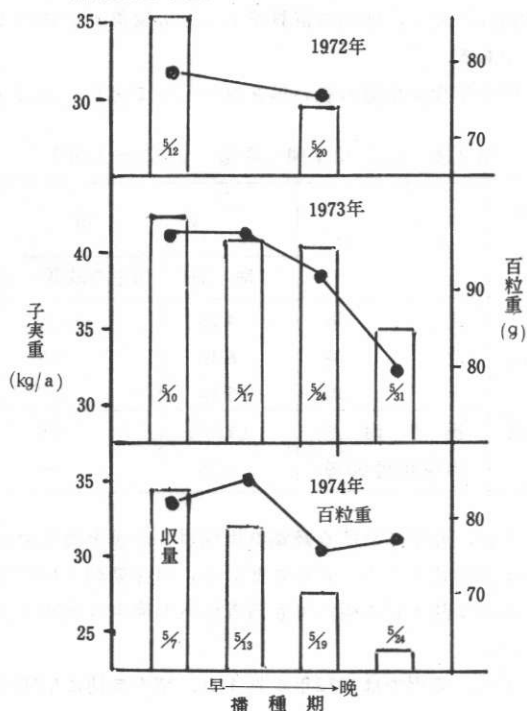
2 供試品種 タチマサリ、参考品種として白油7-3、ワセダイリュウ

3 施肥量(成分量) N-0.3, P₂O₅-0.5, K₂O-1.2 kg/a

4 供試条件 マルチ栽培で、5月上旬から下旬までを4時期に分けて播種。

3 試 験 結 果

1 播種期と収量



第1図 播種期と子実収量

第3表 播種期と開花登熟の関係 (1974)

項目 播種期 (月日)	開花 期 (月日)	株 当 り 開花数(花)		8 月 3 日 子房柄 (本)			a 当 り			
		7 月 20 日 で	終 花 ま で	英 付	侵 入	未 侵 入	英 実 重 (kg)	む 歩 き 実 合 (%)	子 実 重 (kg)	指 数 (%)
5. 7	6.13	83	189	18	14	14	48.6	71	34.3	107
5.13	6.19	71	194	8	16	16	45.7	70	32.1	100
5.19	6.24	53	205	8	19	12	41.4	66	27.3	85
5.24	6.27	51	186	4	16	12	36.7	65	23.7	74

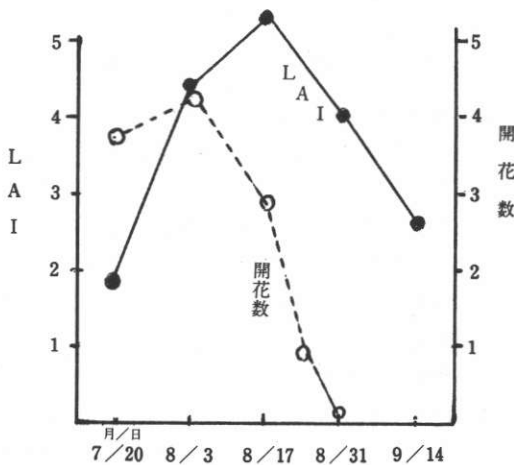
開花数は8月上旬が最高で1日平均1株に4~5花が開き、LAIが5をこえる8月中旬に急激に減少することが認められた(第2図)。

開花数190に対して、子房柄の発生率は39~44%で約80本前後であった。また、最終的な着英率は開花数の9.9~11.7%の間で、播種期による差は小さい。したがって収量差に関与するものはみかけの英数でなく、結英の時期、すなわち英実の充実の差にあると考えられる。

4 む す び

ラッカセイは温度要求量が大きく、高温年次のマルチ栽培でも、北東北においては晩播の減収はまぬがれない。高温年次で5月末、低温年次では5月20日以降の播種では、子房の充実が劣り、20%以上の著しい減収傾向がみられ、反対に早播き程多収を示した。

播種期の早限を規制する晩霜の害は霜の出現頻度80%を満たせば、危険率は極めて小さいと考えられるので、その日から出芽期間をさかのぼった日が播種期の安全限界とみなされる。また、マルチ栽培のラッカセイは軽い霜であれば実害はないので、1℃以下気温の最終出現日などを考慮して、さらに播種期を早めることができるものと考えられる。



第2図 LAI, および日別開花数の推移
(1964年5月13日播)

ラッカセイのマルチ栽培に関する研究

第3報 栽植様式と密度について

佐藤 忠士・佐々木邦年・大野 康雄
(岩手県農業試験場)

1 ま え が き

東北におけるラッカセイのマルチ栽培は、普及当初から m^2 当たり13株前後の密度で栽培されてきた。これは繁茂量の大きい白油7-3の場合 m^2 当たり13.9株で単位面積当たり最大の英数が着生する結果を得ており、適正な密度であったと考えられる。

繁茂量が小さい極早生大粒の新品種タチマサリの導入に伴い栽植密度を再検討した結果、密植による増収

効果など、栽植様式と密度について若干の知見を得たので、その概要を報告する。

2 試 験 方 法

1 供試品種 タチマサリ

2 播 種 期 1973年; 5月13日
1974年; 5月14日

3 施肥量(成分 kg/a) $N-0.3, P_2O_5-1.5, K_2O-1.2$